

## タイ・ビルマ漆器と中国虫糞茶

京都大学名誉教授（森林科学専攻）

渡辺 弘之

### 虫糞茶

#### 雲南省にはないのか 虫糞茶？

お茶はもともと葉であった。現在でもチャ以外に、ササ、グアバ、ドクダミなどいろいろなものが、お茶として飲まれている。最近では 16 茶とか 24 茶とか、たくさんの原料を混ぜたものがある。いろいろなものを混ぜた方が効きそうにも思えるが、混ぜればいいというものでもなからう。相乗効果とともに、効果の相殺というのものもある。

虫の糞をお茶として飲む「虫糞茶」というのがあることを知ったのは、安松京三『昆虫物語 昆虫と人生』（新思潮社 1965）であった。タイのカセツアート大学でのことだが、ナナフシにグアバの葉を食べさせ、その糞を集め炒ったあと、お茶として飲むとあった。その後の、周達生『食文化からみた東アジア』（三省堂 1988）、『東アジア食文化探検』（日本放送出版協会 1991）で虫糞茶は広東省英徳が産地とあった。

チャにはミノムシ、チャドクガなどいろいろな虫がつく。それも新葉を好んで食べる。新葉は人と虫とのとりあいになってしまい、結局、農薬をかけられてしまう。基本的には大きな茶園での無農薬のお茶は簡単にはできない。正直には低農薬茶となるはずだ。

ほっておいて、虫が食べるに任せ、その糞を集めたら、それはチャの葉だけの適度な粉末、抹茶だ。お湯を注いだらいい味と香りが楽しめそうだ。それも完全に無農薬だ。虫糞茶とは、どんな虫の糞なのか、どうやって糞を集めるのか知りたいと思っていた。1998 年 11 月、雲南省昆明・西双版納へ行ったとき、同行の昆明生態学研究所の研究員に「蟲糞茶」と書いたメモを渡して、これを見たいと伝えておいたが、どの村へ行っても何の反応もなかった。

1997 年 4 月、昆明にある林業科学院資源昆虫研究所の陳曉鳴さんが、ラックカイガラムシのことで京都まで訪ねて来られた。このとき、雲南省で虫糞茶を捜したが見つからなかったと話すと、「それ私が研究しています」と、意外な展開になった。帰国されたあと、論文別刷り（陳曉鳴 1989：林副特産虫茶 森林及人類 1, 18；優其敬・趙章保 1979：化香夜蛾的初步研究 昆虫知識 16, 3, 122-124）とサンプルの虫糞茶が送られてきて、虫糞茶のことが少しわかった。

化香夜蛾はソトウスグロアツバ（右の写真 1）、化香樹はノグルミ。

まず、葉っぱはチャではなかった。6～7 月、化香樹（ノグルミ）の枝葉を屋外に建てた小屋、あるいは家屋の 2 階、屋根裏などにタケ製のむしろを敷き、その上に、化香樹の葉を 50～70 cm にも積み上げる。タケ製のかごに葉を詰めることもあるようだ。これにお米のとぎ汁をかけて放置する。2～3 日で葉は発酵をはじめ、いい香りがただよう。化香夜蛾（ソトウスグロアツバ）がこれに誘引され、飛んできて、ここで交尾産卵する。飛来は夜 8～9 時が最高だという。



孵化した幼虫はこの枯れて発酵した葉を食べて生長する。特別な管理はいらないが、葉が乾燥している時は適度のとぎ汁をかける、新しい葉を混ぜることは効果があり、古い葉の間に入れる。虫糞の回収は 11～12 月、虫糞と残った葉を扇風機などで選り分けたあと、十分に乾燥させる。黒褐色のものを 1 級品、糞のかたちの崩れたものを 2 級品とする。100 kg の化香樹の葉を与えて最大 40 kg の収量ということになる。6～7 月に葉を積み上げたのだから、2～3 世代の化香夜蛾が発生したことになる。生産地は広西省中山という標高 700～800 m のところである。論文によれば、ノグルミ以外にもオウレンボク（黄連木）、カギカズラ（鉤藤）なども与えるとされている。

化香樹とはチャではなく、ノグルミ (*Platycarya strobilacea* クルミ科) のことであった (右の写真 2)。中国、台湾、朝鮮、そして日本にも本州 (東海地方以西)、四国、九州に分布する。また、化香夜蛾はソトウスグロアツバ (ソトウスモンアツバ) (*Hydrillodes morosa*) であることがわかった。翅を広げて 2 cm くらいの地味な小さな蛾で、日本でも宮城・秋田を北限に九州まで広く分布し、日本・中国だけでなく、北はウスリーからスリランカ、インドからボルネオ、パプアニューギニアまでアジア大陸東部に広く分布するとされる。蛾類図鑑ではこの蛾の特定の食草をあげていない。「幼虫は枯葉を食べる、与えれば生の葉も食う」としている。



### さてその味は

新しいチャの葉を食べた虫の糞と期待していたのだが、ノグルミ、それも枯れた葉を食べさせた蛾の糞、さらには数ヶ月間は放置したものだという、カビが生えていて当然だろう。その間、この蛾を食べる捕食性の昆虫も来たはず、これら他の虫の糞も混じっている？と疑った。こんなことを疑いながら呑んだのだから、これはいけるとはならない。効能にはお茶よりビタミン・ミネラルを含んでいるので、「清涼去暑」、すなわち清涼飲料水として、さらには清熱、去暑、解毒、消化に効果がある、タンニンを含むので収斂剤として鼻血、歯からの出血、止血に効果がある」と述べられている。

学生とのお茶の時間に「中国から珍しいお茶をもらった」と暗示をかけ、先に味見をしてもらった。「これ漢方薬ですか、まずいな」という。「高いお茶だぞ」と私も口にしてみた。とても乙な味とも言えなかった。濃すぎたようだ、それにやはりカビ臭い。

初めに書いた通り、日本でチャの葉を虫に食べさせ、その糞をトラップですぐに回収した完全無農薬の虫糞茶は絶対おいしいと思う。どなたか作ってくれたら、真っ先に注文する。

それでも中国広西省での実際の虫糞茶作りは見てみたい。

### 参考文献

渡辺弘之：虫糞茶 関西自然科学 47, 11-15 (1998)

渡辺弘之：アジア動物誌 めこん (1998)

渡辺弘之：森林研究ノートから (3) 中国の虫糞茶 自然と緑 No.71, 2-3 (2013)

## タイ・ビルマ漆器とビルマウルシ林

### 日本のウルシ (漆) は外来? 自生?

漆・漆器はブータンから日本までの極東アジア南部のものだが、最近までウルシ (漆) (*Toxicodendron vernicifluum* = *Rhus verniciflua*) の原産は中国・ヒマラヤとされ、日本のウルシも中国からの渡来とされていた。ところが、福井県若狭町の縄文遺跡鳥浜貝塚から 12,600 年前のウルシの枝、5,500 年前の赤色漆塗りの櫛が出土し、北海道函館市の垣ノ島遺跡でも約 9,000 年前とされる漆工芸品が出土し、ウルシ自体が日本にも自生していた、漆を利用する技術自体ももっていたともされる。それはともかく、大宝令 (701) に漆部司を置くところから、古くから漆の特性は理解されていたようだ。正倉院御物にも漆器があるし、法隆寺の玉虫厨子も漆塗りだ。金閣寺や中尊寺金色堂などの建物や内陣、棺桶、経典箱や文書箱などの工芸品、さらにはお椀やお箸などの日常品まで、身近なところにも漆が使われている。産地も会津、木曾、輪島、飛騨春慶、若狭、久留米、琉球など、それぞれ特徴をもった漆器の産地がたくさんある。

漆塗りには何度も塗り厚くした漆層に彫刻した堆朱、漆塗りに線彫りしそこに色漆を埋め研ぎだすキンマ、貝殻をはめ込む螺鈿、金を埋め込む沈金などがある。

### タイ漆器・ビルマ漆器

タイ北部のチェンマイ、ミャンマーのバガンやマンダレーなどに、タイ漆器・ビルマ漆器と呼ばれるものがある。しかし、そのかたち、デザインは日本の漆器と大きくちがう。日本の漆器がお椀やお盆、あるいは重箱など、主として単純なかたちをしているのに、タイ漆器・ビルマ漆器は花瓶・宝石箱、あるいは鳥獸のかたちをした置物など、複雑なかたちをしている。日本の漆器はろくろ (轆轤) を回した盆や皿、あるいは寄木の箱に漆を塗っているのに、タイ漆器・ビルマ漆器はタケを薄く裂きこれを編んでかたちをつくり、そ



の上に細かい粘土を塗り込み、これに漆を塗ったものだ。どんなかたちでもできる。中はタケを編んだものだけに薄く軽い。これを藍胎漆器という(右の写真3)。

タイ、チェンマイには漆液の上に、卵の殻をおき、これを少しずつ砕きながら広げていくというのがあった。これは日本にはない漆塗りだろう。ミャンマー、ヤンゴンのシュエダゴン・パゴダは金色に輝く主仏舍利塔を中心に60とも100ともいわれる大小のパゴダがこれを取り囲む。金色は金色のペンキを塗っているのかと思ったが、これは金箔を漆で貼ってあるのだという。

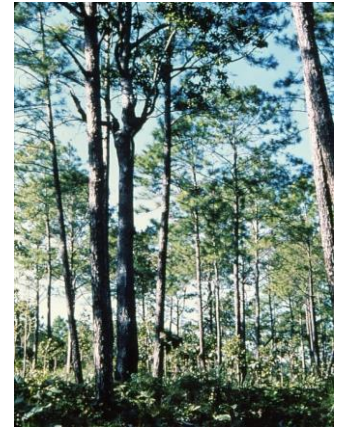


### タイ北部ゴールデン・トライアングル

日本のウルシとビルマウルシは同じウルシ科だが、樹種がちがう。タイ語でラック・ヤイ、ミャンマー語でティシイと呼ぶビルマウルシ (*Melanorhoea usitata*=*Gluta usitata*) である。落葉性の樹木でインドからインドシナ半島にそれもやや高地に分布し、直径70 cm、樹高25 mもの巨木になる。葉は単葉でマンゴーに似ている。1990年11月と1991年10月の2回、タイ北部の山岳地ゴールデン・トライアングルにビルマウルシのある森林はどんな構造なのか、どうやって漆をとるのか、チェンマイの西のカレン族の村ノンクラティンと北のタイヤイ族の村チェンダオへ調べに行った。

### ハートマークは何に？

ノンクラティンではビルマウルシはメルクシマツ林にあった(右の写真4)。マツ林の中にあるのだから、ビルマウルシはすぐにわかった。立木本数600~900本/haにビルマウルシが167~480本/haあり、胸高断面積合計は4.6~6.2 m<sup>2</sup>/ha、最大のもは直径42 cmであった。稚樹は980~1,133本/haもあった。日本の漆掻きは水平に、あるいはやや斜めに溝状の傷をつける。しかし、漆掻きの傷がない。ここでは漆液を採っていないのかと思っていたとき、眼の前の樹皮に縦に30 cmくらいの傷がつけられ、黒い漆液が滲み、その下に細く短い竹筒が打ち込まれているのを見つけた。漆液を竹筒で受けていたのである。タケ竿の先に刃物をつけ、それで傷をつけていたが、大木でもその傷はたった一列、縦に2、3本が並ぶだけであった。たくさんつければ、漆液がもっと採れるのと思ったが、毎年採れるようにとの工夫だったようだ。



もう一つのチェンダオではビルマウルシはフタバガキ科樹木を主とする混交林にあった。立木密度483~967本/ha、その中にビルマウルシが117~133本/ha、胸高断面積は16~21 m<sup>2</sup>/ha、最大直径59 cmであった。しかし、ビルマウルシの稚樹は多いところでも67本/haしかなかった。ここでは縦に傷がなく、幹にハートのマークが彫りつけてあった(右の写真5)。はじめ誰かのいたずらかと思ったのだが、これがタイヤイ族の漆液採集法であった。大木ではタケ製の一本はしごが固定され、上の方までハートマークがつながっている。ハートマークの下に太く短いタケ筒が打ち込まれている。大木では一本に30~40もの傷がついていたが、古い傷が残っているのである。はじめ一辺が15 cmくらいの逆三角形の傷をつけるのだが、漆液を採ったあと、まわりの樹皮を少し削るので、次第にハート形になるということだ。漆液は1年に3回ほど採るようだ。



### 馬毛胎漆器

ミャンマーでのウルシ林の調査はまだしていないのだが、遺跡の町バガンの漆器店でおもしろい漆器をみつけた。マグカップのようなものだが、表面にはていねいに模様が彫られている。同じものが二つ並んでいた。店員が一つをとって横腹をポコポコと押した。漆器がひび割れし壊れると思ったのに、柔らかいプラスチックのようにもとに戻っている。日本の漆器にない特徴だ。これが馬毛胎漆器と呼ばれるもの、タケを編んで器の形をつくり、それに馬の尻尾の毛をていねいに巻き付け、それに漆を塗ったものだった(右の写真6)。



## ウルシ林の管理

タイやミャンマーの漆器生産を守り、さらに発展させるためにも良質の漆を、それも安定して供給する必要がある。しかし、タイ北部の山岳地のフタバガキ科樹木を優占種とする天然林にはビルマウルシの稚樹はきわめて少なかった。これでは持続的な漆生産はできない。野火の侵入を防ぐなどでビルマウルシ稚樹の発生を促進しないといけないと提言したのだが、タイ政府は森林伐採を禁止しており、山岳少数民族による漆液採取も違法だとして、きつく取り締まっていた。訪れた営林署には押収したたくさんの漆掻きの道具や竹筒があった。樹皮に傷をつけ漆液を採取することは森林伐採を助長するものでなく、漆液を採るため森林を維持し、地域住民の収入が得られると報告書に書いたのだが、簡単には法令は撤回できないのであろう。実際、漆器店で聞くと、良質な漆液が不足し、フタバガキ科樹木の樹脂などを混ぜた粗悪品がでまわっているといっていた。

日本での漆液の消費量は年間 300~350 トンとされるが国内生産はわずか 5 トン、消費量の 1.5% にしか過ぎない。そのほとんどは中国からの輸入であるが、ベトナムから 10~15 トン、そしてタイからも 5 トン程度が輸入されている。

タイ北部のビルマウルシ林の構造、そこでの漆の生産を調べたのは私たちがはじめてだっただろうが、漆にきわめて弱い私、かぶれないかと戦々恐々の毎日だった。まったくかぶれない体質の学生が腕にたっぷり漆液を塗りつけるのにも驚いた。日本の漆の成分はウルシオール、タイ・ミャンマーのものはチチオールとされ、成分がちがう。幸いかぶれなかったので、かぶれ方がどうちがうのかは確認できなかった。

## ベトナムのザル舟

ベトナム北部のタケを編んだ舟の底には漆を塗っているという話がある。1995 年のこと、ハノイの南、ニンビン省ホアルアという観光地へ行った。ザル舟で低い天井の石灰岩洞窟をくぐるのだが、舟に乗って往復 3 時間ほどかかった。料金は 25,000 ドン (250 円) だった。船頭は女性二人、一人がともに立ち長い竿で方向転換し、もう一人が前向きにすわって櫂をこぐ。途中沈んでいた倒木に乗り上げ座礁、傷ついた底から水がしみだしてきた。まさしくザル舟だった。確かに舟の底は真っ黒、嬉しがって写真を撮ったのだが、ベトナム研究者によればこれはアスファルトに石灰を混ぜたもの、値段の高い漆をそんなところに使うはずがないといわれた。考えたらやはりそうだろう。

## うるしの日

ところで、「うるしの日」というのがあるのをご存じだろうか。11 月 13 日だ、京都嵐山の十三詣りで知られる法輪寺に惟喬親王が参籠し本尊虚空蔵菩薩より漆の製法と漆塗りの技法を伝授されたとされる日で、ここに「うるしの碑」がある。

## 参考文献

- 劉 恵民・石 卓功・渡辺弘之：中国・雲南省の特用（非木材）林産物について 熱帯林業 36, 59-66 (1996)
- 渡辺弘之：ベトナムのざる舟 京都園芸 91, 115-116 (1997)
- Watanabe, H., S. Takeda, C. Khemnark, P. Sahunalu & S. Khemyong: Management of natural forest containing lacquer trees (*Melanorhorea usitata*) in northern Thailand. FORTROP' 96 International conference. 43-53 (1998)
- 渡辺弘之：東南アジアの工芸樹木—ビルマうるしとラック— 漆文化・日本文化財漆協会会報 85, 10-13 (1998)
- 渡辺弘之：熱帯林の保全と非木材林産物 森を生かす知恵を探る 京都大学学術出版会 (2002)
- 渡辺弘之：熱帯林の恵み 京都大学学術出版会 (2007)